

大学の国際交流40年

— その歴史と展望 —

出席者：小嶋 哲（大学国際センター事務室長）
富澤 拓（大学国際文化学部4年、2009–2010吉林大学交換留学生）
古川 暢朗（元大学文学部教授）
宮原 哲（大学文学部教授）
ロランス・シュヴァリエ（大学文学部教授）
司 会：小林 洋一（百年史編纂委員長、大学神学部教授）

（50音順・敬称略、肩書きは当時）



司会（小林）：今日は、お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。これから、テーマに即して座談会を始めたいと思います。西南学院は国際交流という点で、歴史と優れた伝統のある大学として知られております。資料によりますと、1971年にアメリカのベイラー大学との姉妹校宣言、あるいはニューヨーク州立大学との留学生の交換を始めてから、ちょうど40年が過ぎたということになりま

す。その間、協定校との交流実績も増え、世界各国で活躍している卒業生も多数いらっしゃいますので、その成果も踏まえて語っていただきたいと思っております。それでは、早速、ご自分の国際交流との関わりについても触れながら簡単な自己紹介をお願いしたいと思います。

古川：古川です。私は本学のOBで1957年に英文学科を卒業しました。在学中、まだ国際交流という制度がなかった時

代に私を含めクラスメイトたちが留学を目指していたところ、幸いにもスポンサーがアメリカで見つかり、移民船の船底に寝泊りしながら13日かけてカリフォルニアに渡りました。とても親切にいただいた西南のL.G. フィルダー先生が入学先を見つけてくださって、その上奨学金も受けられるという願ってもないスタートになりました。そこで2度目の大学を卒業して大学院に進み、カリフォルニア州立大学ドミンガス・ヒルズ校で助教授として教え始めました。その当時、アメリカの日本語教育は開拓期でこれからという時代でした。そして1970年に東京の武道館で開催された第12回バプテスト世界大会に出席することになり、留学して以来初めて日本に帰ってきましたが、そこで偶然にJ.W. シェパード先生、フィルダー先生と大変奇跡的、運命的な出会いをしました。その時、フィルダー先生から、「西南で国際交流を計画しているけれども、興味はないか」と聞かれ、興味はあるが、まだアメリカで教えているのでとお茶を濁していたところ、それ以後、大変不思議なことに西南に深い縁がある人々とお会いすることになりました。最初にベイラー大学に交換教授で派遣された平田正敏先生から連絡があり、大学の初めての交換留学生でニューヨーク州立大学に留学する小島平夫君¹を迎えに行ってくれないかということでした。これが西南との関係の始まりで、その後、船越栄一学長や大内和臣教授など、多くの人たちが協定校の視察のためロサンゼルスに來られて、そこで私が運転手兼ガイドになり、いろいろな大学

に行きました。そこで国際交流計画の話が出て、船越学長に西南に就職できれば戻りたいけれどもとお話ししたところ、運よく1973年10月に文学部助教授として国際交流計画に参加していくことになりました。これから先はまたあとからお話します。

司会：大変ありがとうございました。先生の経歴そのものが、西南の国際交流の初期の頃と重なるということがよく分かりました。それでは、次に小嶋さんをお願いします。

小嶋：国際センター事務室長の小嶋と申します。国際交流との関わりは、6年前に国際センター事務室に異動してからになります。当時の国際センター所長であった今堀義教授が積極的に協定校の開拓を推進しており、国際交流が活発になってきたと実感したのを覚えています。その後、国際交流をさらに発展していくために、2008年には「国際交流見直しに関する検討委員会答申書」が出されました。それに加え、2011年2月にパークレー学長が2期目の所信表明を行い、海外派遣留学生と留学生別科学生をそれぞれ100名にしたいという構想を打ち出されました。現在は、その実現に向けて努力しているところです。詳しいところは、また後からお話したいと思います。

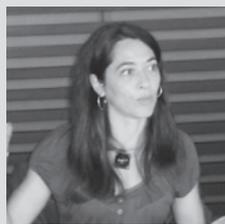
宮原：文学部外国語学科英語専攻の宮原です。私は高校、大学と西南で、1978年の英語専攻卒業ですが、西南に來た大きな理由というのが交換留学の制度です。当時は今と違って1ドル=300円の時代で、また現代のように自分のお金で留学するというようなことは考えられず、大学の交換派遣制度しか

1 現在本学商学部教授、現国際センター所長

かったので、とにかく留学することを唯一の目標に西南にきました。その夢がかなってニューヨーク州立大オネオンタ校に派遣され、どっぷり英語漬け、アメリカ漬けの10ヵ月を過ごしました。ようやく自分で言いたいことが言えるようになった頃、帰国しなければいけないという非常にもどかしいのが交換留学なんですね。それで、何とかもうしばらくアメリカに留まりたいという気持ちで、親を納得させるには大学院に行くしかないと思い、ペンシルベニア州立大学でコミュニケーション論を学び、博士号を取りました。そのころ西南で国際交流に関わっておられたホートン先生が定年退職されて、その後任の求人があり、1986年に西南に帰ってきました。その後、授業でも留学の話をしたり、留学希望者の面接や留学準備講座を担当しました。国際交流とは、2001年から2003年まで国際センター所長として最も深い関わりがありました。それまで大学全体の方針として、新しく協定校を増やさないとという一時凍結していた時代がありました。その方針が変わってきたので、にわかに語学研修のプログラムや協定校を増やすなど、2年間で合計20回ほど海外に行って多くの大学と交渉しました。今も増えつつある協定校を見ると、一つの礎を作ったのではないかという気がしています。私が高校生頃から関心を持ってきた国際交流にこのような形で今でも関われるということは、大変意義があることだと思っていますし、これからも西南の国際交流にどれだけ貢献できるかわかりませんが、一生懸命やっていきたいと思っています。

富澤：国際文化学部の4年生の富澤と申

します。国際交流という観点からすると、2009年から2010年に中国の吉林大学に交換留学生として行きました。大学入学以前は中国に対して全く興味はなく、むしろ語学、英語に興味があり、勉強したいと思って西南に入学しました。たまたま大学2年生の頃に短期の中国語学研修の募集があり、近しい行ってみようと思って約1ヵ月の語学研修という形で行きました。これが中国に興味を持ったきっかけですが、その時、とても中国の“人”に惹かれて、彼らともう少しコミュニケーションが取れるようになりたいという単純な思いがありました。そして日本に帰ってきて国際センターに尋ねると、中国の吉林大学に交換留学制度があることが分かったんです。中国での経験というのは自分にとって大きな糧となり、卒業を1年延ばして就職活動をしました。が無事に就職も決まりました。留学という経験は、自分の中で本当に大きな意味があるものだとして1年経った今、そう思います。



シュヴァリエ 教授

シュヴァリエ：文学部外国語学科フランス語専攻のシュヴァリエです。国際交流関係といいますと、私は20年前、つまり1990年にグルノーブル第3大学の交換留学生として西南学院大学に來ま

した。1年間西南でいろいろなことを体験してフランスに帰国し、今度は1995年にフランス語の教員として再度、西南にきました。留学ということでは、もちろんフランス語専攻の教員だから、西南の学生は全員フランスに留学できればいいと思うんですが(笑)、そうもいきませんので、ぜひフランスに行ってみてと後押ししています。そして、フランス語専攻では、1年間や6ヶ月の留学だけではなくて短い研究旅行など、いろんな機会がありますので、フランスに行こうと思えば行けるチャンスはかなり多いと思います。

司会：ありがとうございます。皆さんの自己紹介を伺いまして、すでに、すてきな、素晴らしいなど、何か心の中に熱いものが込み上げてきました。それから、本題に入る前に、国際交流の現状を国際センターの小嶋さんに少し説明をしていただけたらありがたいと思います。

◇国際交流の現状

小嶋：現在、国際交流協定校は10カ国で32大学になりました。先ほど、宮原先生が言われましたとおり、2000年以前は協定校の開拓が凍結されており、海外派遣留学生も25人前後を推移していました。宮原先生が国際センター所長になられた2001年以降から格段に協定校が増えていきます。協定校も以前はアメリカに偏っていましたが、いろんな国から学生を相互に派遣し、そこでさまざまな異文化を学んでほしいという方針から、現在はフィンランドやノルウェー、イタリアなどのヨーロッパをはじめ、アジアの大学とも協定を結んで、2011年度は49人の学生を派遣しま

した。来年度はさらに増えて、61人と過去最高の人数となります。海外派遣留学の応募者数も、昨年度は103人の応募があって毎年増え続けています。よく新聞に日本人学生の留学離れが起こっているというような記事が出ていますが、本学ではそういう状況はありません。やはり留学したいという学生が多く、現在、短期語学研修も10カ国13研修先で実施しており、年間に約250人が参加しています。大学全体としては国際交流に関心がある学生が入学しているのだと感じています。国際センターでは、その多くの学生たちに異文化理解を深める体験をどれだけ提供できるのかを日々考えているところです。

また、協定校が少しずつ増えても、本学の受入留学生数は2004年度までは20人程度と、思ったほど増えなかったのですが、2005年度からは約30人に増え、2011年度は57人の留学生を受け入れました。この理由は、これまで西南では留学期間を1年間に限定して受け入れており、半年間の留学という制度はありませんでしたが、半年間でも日本に留学をさせて経験を積ませたいという協定校からの要望を受けて、2005年から半年間、留学生を受け入れることが可能となったからです。

司会：1971年から2011年まで一気に振り返りましたがけれども、協定校の拡大だけではなく、また一定の地域だけではなくて、非常に大きな広がりをもってきているということが分かりました。それから今の学生は、内向きで留学したがるらないという傾向の中にあっても西南には海外留学に関心を持って入学している学生が多いという指摘もありました。そのあたりはどうですか。

宮原：去年103人が応募して、少しずつ増えていっているという話だったのですが、本当はもっと増えなければいけないと思います。我々の時代も派遣学生20人くらいに対して約100人の応募者がいたわけですから、今の派遣学生はそれの倍、3倍近くになっているけれども応募者はそれほど伸びていない。語学系の学生だけではなくて、社会科学系の学生も、まずは短期の語学研修からでもかまわないのもっと挑戦してもらいたいと思います。国際交流が当たり前、留学をすることが当たり前という空気を我々スタッフが全学に広めなければと感じます。

司会：良いご指摘をいただいてありがとうございます。この短期の語学研修というのは増えているんですか。

小嶋：ええ、増えています。やはり海外で語学力の向上を目指して短期語学研修に行きますが、帰ってきた学生の感想を聞くと、海外で自分の力で生活してきたことが自信になったとか、いろんな価値観を学ぶことができたとかよく聞きます。帰国後、その経験が語学力やコミュニケーション能力を高める動機付けになっていて、そこで短期語学研修を経験した学生が派遣留学に応募するというケースも増えています。それと、宮原先生の時代は無条件で誰でも派遣留学に応募できましたが、現在は学内成績やTOEFLの点数などの応募資格を満たしていないと応募できない制度となっていますので、単純に比較はできないかなと思います。留学したいと思っても、応募資格のTOEFLスコアや在学成績が基準に達していないために留学を断念する学生がたくさんいます。入学時から留学準備の指導がもう少しできれば、派遣留学生も増えるのではないのでしょうか。

◇E. B. ドージャー院長の功績

司会：それでは、次に国際交流を始めた頃の苦労話をお聞かせください。古川先生は、1971年に国際交流を始めて3年後の1974年に西南に赴任されましたので、その頃のお話なども伺えるのではないかと思います。



古川 名誉教授

古川：まず西南の国際交流計画が始まる前に、エドウィン B. ドージャー院長が海外の大学と交流したいと考えられたのがきっかけで、その後、W. M. ギャロット院長や船越学長、シェパード先生がそれを引き継いで計画を進められました。ギャロット院長はご自分の心臓手術を受けるために帰国されたのですが、帰国後も西南の国際交流計画を何とか進めたいとアメリカのミッション・ボードの方と電話や手紙で連絡して下さったそうです。そこで国際交流を始めるにあたって、ミッション・ボードに大学資格を認定調査する機関を西南に送ってほしいと希望してボードから1974年にエデュケーション・コンサルティングチームを派遣しています。そのチームは、大学の学長や教員、アクレディテーションの長などそうそうたるメンバーで、3日ばかりで西南学院大学を調査されました。

この査定で西南はもちろん認定されて、その単位は全てアメリカの大学で受け入れられる価値があるという認定書をいただきました。その後、すぐにワシタ・バプテスト大学とウィリアム・ジュウェル大学から国際交流計画に参加したいという申し出があり、交換協定を結びました。それ以来、両校とは非常に親密な関係が続いています。その後、オクラホマ・バプテスト大学やサンディエゴ州立大学、フランスのグルノーブル第3大学などが参加するようになってきて、徐々に国際交流も盛んになってきました。この国際交流が始まる前に、ドージャー院長の発案から、ギャロット院長、船越学長など多くの方たちの努力で十分な下準備がされていたことを知って感慨深いものがありました。それから少し付け加えさせていただきますと、1979年に元グリークラブ部長だったシェパード先生が宣教師の任を終えて、ベイラー大学に戻るにあたって海外演奏の計画を当時のグリークラブ部長の私に勧められました。西南学院大学にとって初のアメリカ演奏旅行でした。国際交流でお世話になった協定校を回っての演奏旅行は、西南を海外の大学の方たちにより身近に知ってもらうことにも貢献できたのではないのでしょうか。

司会：さらに付け加えると、E. B. ドージャー院長の奥様のメアリー・エレン・ドージャーさんが宣教師の任を終えて帰国する際、ドージャー院長の遺志を受け継いで、留学をする学生を対象に奨学金を設けられましたね。その当時の日本の他大学の状況はどうでしたか。
古川：その点は、国際交流制度を実施す

るため、西南でもいろんな調査が行われていましたが、その当時、日本で盛んに国際交流を進めていたのは早稲田大学、それから上智大学、慶應義塾大学、国際基督教大学、明治学院大学、国際商科大学²などがありました。そういう大学が盛んに国際交流に取り組み、実績を上げていたので、他大学も興味を持ち始めていました。西日本地区では西南が最初に国際交流を始め、力を入れている大学ということで有名でした。しかし予算の関係があり、拡大できないというジレンマがありましたので、徐々に留学生の人数なども他大学に追いつかれて、トップを走っていた大学だったのがまたたく間に後退していったという事実があります。

司会：大変貴重で、かなりよく調べられたお話でしたけれども、先人たちの創造的なビジョンあるいは努力で、今日の西南の国際交流の基礎が築かれたということですね。

◇国際交流における西南の特長

司会：それでは、次に「建学の精神が表れている特長」ということについてお伺いします。西南の場合、国際交流に建学の精神が表れているというのは、クリスチャン・スピリットのようなものだと思いますが、その点に関しては、古川先生、どうお考えですか。

古川：あの頃、船越学長が言っておられたのは、西南学院大学にクリスチャンカラーとインターナショナルカラーの両方が必要だということでした。具体的に言うと、クリスチャンカラーというのは、ミッションスクールであると

ということで、宣教師の方が多くおられたから、そういった意味ではキャンパス自体に自然と国際的な雰囲気があったのではないのでしょうか。これがアメリカから認定調査に来たときに、非常に大切なポイントで、認定調査チームが大学を見て、学生たちの会話や授業でクリスチャンスピリットが、学内全体に漂っていることを身を持って感じられたということです。それからインターナショナルスピリット、言い換えればインターナショナルカラーというのは、外国人留学生たちがキャンパスなどで、日本人学生たちと盛んに交流しているということも、大学広報などでかなりPRされたので、こういうことを特長にすればいいのではないかと考えてだと思います。実際に、それが特長になってきましたね。

司会：キリスト教は、歴史的に民族、国境あるいは文化を超えてそれぞれが一人の人間として相互理解していくという考え方ですが、そういう意味で強調されたんですか。

古川：もちろん入学式や卒業式で、民族を超えた交わりという主題を強調している賛美歌が選ばれていたと記憶しています。民族を超えて文化をお互いに知り合うために、ホームステイなども盛んに行われていました。

宮原：異文化コミュニケーションの授業などでは、まず海に囲まれた日本があってその周りに異なった、あるいは変わった文化があるという、「日本ありき」から出発する傾向が強いということを話します。しかしヨーロッパやアジアでは、道を越えれば違う国、違う文化ということで、やはり世界での教育は、まず「異文化ありき」。その中に日本というたまたま自分と同じ価

値を共有している文化があるんだという出発点が必要だと思います。だから、外国人教員をキャンパスの中で見かけることが珍しいことではないということから始まっているのは、かなり異文化に対しての感受性があり、大学の雰囲気に貢献している気はしました。それとは別に、「建学の精神が表れている特長」で私が思ったのは、西南はやはり自由という校風があると思うんです。それで、冨澤さんにお聞きしますが、中国に行った時に少し不安に感じたというか、当然不安なだけけれども、西南はあまり面倒を見てくれないと感じたことはありませんか。特に最初の頃なかったですか。

冨澤：そうですね。正直なところ少しありました。やはり現地では、ビザの申請から授業のカリキュラムまで全て自分でやっていたので、そういう面で日本の大学にいて普通に4年間学生生活を送るよりは自立しました。私の留学を通して得たものの一つだと思います。



宮原：それはいいことだと思います。他大学はどうかというと、最初から最後まで教員が一緒にいて、とても手厚いケアをしてくれますが、反対に言えば自分では何もできない学生を育てているという面があると思います。西南の

場合も、もちろん国際センターを中心として多くの人が手厚いケアをしていますが、そこで異文化を経験して、単位を取ったり落したりするのは全て学生の責任であって、自由ということは本人が最終的には責任を持たなければならぬと身をもって経験させているのではないかと思います。今でも、他の大学に比べれば、良い意味で放任主義、自分のことは自分でするというところが、私は好きです。

司会：「自由と責任」という価値観ですね。ありがとうございます。それでは、次にこの国際交流が大学に与えた影響について考えていきたいと思いますが、まずは個人的なことからお聞きしたいと思います。そして後ほど、大学全体に対する国際交流の影響について評価をしていけたらと思っています。それでは富澤さんから、中国の吉林大学で経験して自分に影響を与えたことや物の見方が変わった体験などがありましたら紹介してください。

◇留学と個人的な体験

富澤：先ほど宮原先生が言われましたけど、やはり日本人だから、日本ありきで考えてしまう傾向にありました。だから、その点では中国は隣国ですけど全く違う文化も持っていて、ましてや言葉も違うし、考え方も違う、食べ物も違う、全てが違う国がこんなに身近にあるんだというのを単純に感じ、自分の視野が非常に広がりました。本当に単純ですけど、世界というのは広いし、深いし、面白いなと感じました。また、中国語を勉強するカリキュラムが組まれていたので、ヨーロッパ圏やアフリカ圏の学生もいたし、中国にい

ていろいろな国の人々と国際的な交流を通して多くを学びました。

司会：シュヴァリエ先生は、フランスから留学生として西南に来て、その後、一旦フランスに戻り、再び来日して西南に就職されるなど非常に貴重な経験をされましたが、どうして西南なのか、また西南に来られてどんな経験が特に印象深いのかをお話いただけますか。

シュヴァリエ：はじめは日本に特別な興味はありませんでしたけれども、ヨーロッパと違う言語を学びたかったので、中国語やタイ語、なんでもいいと思っていたら「日本語入門」が開講されると聞いて、グルノーブルで最初のクラスに入りました。その授業は、西南から交換教授で来られた中村栄子先生の授業でした。そして、留学を考えた時は特に日本というイメージはなくて、広くアジアを考えました。そこで1年間、これまでと違う環境でいろいろな経験、興味深い体験ができればと思っていたので、グルノーブルと西南の間に国際交流プログラムがあると分かって応募しました。日本についての知識はそんなにありませんでしたから、すべてが新鮮という印象がありましたね。日本語を少しだけ勉強していましたから、何とか日常会話はできたんですけど、一番困ったことは、言葉の問題ではなくて日本の文化を説明してくれる人がほとんどいなかったことだったんです。「あのような状況で何をすればいいか」という疑問に説明できる人がいない。言葉だけじゃなくて、行動についても説明はゼロでした。それが一番不安でしたけれど、それはフランスやヨーロッパとかなり違う文化だと感じましたね。具体的に言えば、留学中、弓道クラブに入りましたが、挨

拶やしきたりというシステムが全然わからないままでしたので、日本人学生に質問すると答えに困っているという感じでした。でも個人的に一番大きな影響があったのは、自分のアイデンティティについていろいろなことを考えさせられて、それで自分が変わっていったことです。多分それは留学中、一番大事な経験だと思います。

司会：お二人には非常に貴重な経験をお話いただき、ありがとうございます。次に、国際交流が大学に与えた影響はどうですか。

◇国際交流が大学に与えた影響

小嶋：毎年、帰国した留学生にアンケートを取っていて、その中で「留学したことが役立ったか」というような質問をしています。今年帰国した34人に尋ねたところ、全員が留学は自分の役に立ったと回答しています。他に多い意見としては、「語学力が向上した」、「国籍の隔たりなくコミュニケーションができる能力を身につけた」、「自立心が身についた」、「西南で開講されていない科目を履修することができて幅広い知識を習得することができた」というような意見が出ています。これから見ると、やはり、大学に与えた影響というのは、学生の自立心であろうし、勉強に対する学習意欲や幅広い意味で知識を得ることによって将来に向けて、自分を見つめなおす機会を与えているということではないでしょうか。

宮原：国際センター所長として初めてアメリカに出張した時、実は留学生別科を解消すべきだという気持ちで行きました。日本人が海外の大学に留学をする時には、別科のようなどころに入る

のではなくて、本科に放り込まれます。特別扱いのように別科で授業をしてという、古い形の国際交流は発展的解消し、日本人の学生と同じように日本語で授業をとれるようなレベルの人だけに来てもらいたいから別科は近々やめるという気持ちでした。でも海外の関係者と話をすると、「別科というのは素晴らしい」と言うんですよ。英語で全部できるから日本語を全く勉強したことがない人から堪能な人まで幅広い人が留学できるようなプログラムになっているので、これは是非維持すべきだということを言われました。これまで英語で授業を行う別科を維持してきたことは国外では相当いい感触を得ていることは間違いないですね。これは将来の展望にも結びつくかもしれませんが、「英語を学ぶ」のではなく、「英語で学ぶ」という国際教養学部構想を発展させるために、別科をさらに成長させることが重要だと思います。

司会：そうですね。これは日本の他の大学でも同じようなシステムをとっているわけではないのですか。



小嶋：これまでは専門科目を英語で学ぶことができたのは一部の大学の学部・学科や留学生別科が主でしたけれど、今は“グローバル30³”や“大学の世

界展開強化事業”とって文部科学省による大学の国際化を推進する政策が進んで、日本の各大学で英語で学位を取得できる学部を設置するところがますます増えています。その中に日本人と留学生が同じ教室で英語で専門分野を勉強するようなシステムに変わりがつつあるというのが現状です。西南も海外の国際交流担当者が集まる留学フェアに参加していますが、最近、協定締結の交渉をしていて、傾向が変わってきたと感じています。海外の大学からは以前のように日本の文化、経済、法律などの日本研究関連の分野を学びたいということだけでなく、それよりもアジア全般に関する専門の科目を学びたいという要望が多く寄せられています。特に質問が多いのが英語によるアジアや日本のビジネス系の科目を開講しているのかというもので、開講していれば協定を結びたいとの要望が目立ってきています。このように、海外の大学からは、各学部で教えている専門分野の科目を履修したいという要望が多くなっていることから、留学生別科も現状に少し合わなくなっ

ており、組織改編といったことを検討しなければならぬと感じています。

◇SIFA の力

司会：海外の協定校のニーズも変わってきつつあるので、西南もそれに対応していかないといけないという将来の展望の話になってくると思いますが、それでは将来の展望に入る前に、国際交流のOB・OGの活躍ということで紹介していただけることはありませんか。

宮原：西南の国際交流制度で海外に行った人、あるいは日本に来た人の集まりでSIFA (Seinan International Friendship Association) という同窓会のようなものがあります。ですからシュヴァリエ先生も私もメンバーですけども、ここ最近では3年ほど毎年集まっていて、良い意味で変な人が多いのが特徴です(笑)。少し変わった卒業生で、やはり何かが違う。例えば学生時代に留学して海外の大学で日本語を教えているとか、あるいは留学をきっかけに外資系の会社に就職してその後も海外勤務だったけれど、今は



日本に帰ってきている、という人がたくさんいます。ここで申し上げたいのが、1000人近い学生がこの国際交流制度を使って海外に行って、海外から800人ぐらいの学生が西南に来ています。つまり大学が時間とお金をかけてこれまで培ってきた、そしてこれからさらに発展させようとしている国際交流制度で、いろんな経験をしているOB・OGがたくさんいるのですから、その人たちに自らの経験をいくらか西南に還元してもらうようなシステムを作ってはどうかと思います。西南の卒業生にこんな人がいるということを在学生や、あるいはこれから西南を受験しようと思っている高校生たちに周知させるような方法をもっと真剣に考えなければいけないのではないのでしょうか。SIFAはとても小さな集まりではありますが、今年初めての試みとしてこれから留学する学生は全員参加を義務付けました。それだけで60、70人集まると、全体で100人を超えて、大変賑やかな会になりました。また来年以降もそういう会を夏に行い、新旧の交流というか、OB・OGと現役との交流をもっと盛んにしていかなければいけないと思います。

司会：今、宮原先生から大変貴重なご提案をいただきました。国際交流で投資したものを確実に成果として回収することは重要ですね。

宮原：先ほどは、大学があまり面倒を見てくれないと言いましたが、渡航前にさまざまなオリエンテーションがあり、留学中も毎月1回はレポートを提出させるなど、きめ細かく配慮をしています。しかし、帰国後はそこまで手が回らないので学生任せです。留学で得たものをいろいろな形で現役に還元してもらえそうなことを率先して大

学はやらなければいけないと思います。そうしないともったいないし、自分の体験をもっといろんな人に聞いてもらいたいという気持ちはあるんじゃないでしょうか。そのあたり、中国に行った富澤さんはどうですか。



宮原 教授

富澤：そうですね。特に中国になるとイメージがあまり良くないので、中国の良いところを伝えていきたいと感じましたね。私が出会った中国の人たちは、みんな優しくしてくれましたよ。

小嶋：その還元の話ですけれど、毎年6月には海外派遣留学生の募集説明会、9月に留学フェアを開催して、帰国した学生が、海外派遣留学を希望する学生に留学の体験談を直接話す機会を提供しています。今年も、チャペルでニューヨーク市立スタテン・アイランド大学とハワイ大学ヒロ校に留学した学生に両校での様子を話してもらうことにしました。こんな小さな試みですが国際センターとしても組織的に少しずつ取り組んでいるところです。

◇将来の展望

司会：それでは、最後に将来の展望、西南の国際交流に対する期待、などについてお話をください。

小嶋：西南の国際交流制度は、全国に先駆けて行われたということで、国際性のある大学とアピールしてきましたが、最近では日本の他大学でも大学の特徴として国際交流を掲げ、在学期間の半年間は留学を義務づけたり、英語による授業で学位取得ができる学部・学科等を開設するなど積極的に海外の大学との連携を強めているところが出てきて、西南の国際交流制度や派遣・受入れ留学生の数字の上ではかなり遅れをとっています。これからは、これまでの海外派遣留学や短期語学研修という既存の枠組みにとどまらず、海外の大学生と議論したり、海外の大学の授業を体験することができるショートプログラムなど、学生が異文化を体験できるプログラムの多様化を図っていければと思います。また、海外から留学生を受け入れることは、学生や教員が教育研究の面でお互いに刺激しあい、グローバルな視点でお互いの考えを理解しあうという面で、大きな成果があると思いますので、海外の学生が西南に留学しやすい制度を作る必要があるのではないかと思います。その意味で、留学生別科というのは、お互いに国際交流のメリットを生かしていないと思います。国際センターがイベントを開かなくても、留学生と日本人学生がキャンパスで当たり前と一緒に授業を受けたり、会話や食事をしたりする、そういう国際交流制度ができれば一番望ましいと思っています。

司会：留学生別科の授業で、一応、日本人の学生は聴講生ということで受け入れ始めましたが、その場合には単位化するということまで広がってはいきません。魅力的なプログラムのように思いますが、どうですか。

小嶋：広がってはいますけど、やはりなかなか履修する学生が少ないのが現状です。実際、留学生別科の授業を臨時開講科目として受講可能にしましたが、派遣留学の合格者9人以外は履修する者がいませんでした。やはり学部と留学生別科の学年暦が違うことや留学しようとする動機付けがない限りは授業を履修しないので、そういう学生にもあえて勉強させるような雰囲気、制度作りが必要だと思います。例えば、英語による授業を各学部で行うとか、あるいは将来的にはすべて英語で授業を行う学部を新設するといった取り組みが必要なのではと考えています。

司会：貴重な意見ありがとうございます。それでは、古川先生はいかがですか。

古川：私は退職した身ですので、将来のことは申し上げるのがはばかれますが、私が希望するのは、やはりこの大学全体が、アメリカの大学のように全ての学生が、わけ隔てなく普通の学生として入学できればいいと思います。私の場合はアメリカの大学しか経験がないですけども、先ほどの話に出たように、留学生別科という特別な枠をなくして普通に授業を受け、そして一人の学生としてお互いに交わっていく、そういう大学になれば理想的だと思っています。

司会：それにはどうしても言語の壁があって、アメリカの大学の場合は、当然英語を話して、アメリカの学生の中に溶け込んで行くということがありますが、逆の場合、日本の大学に留学した外国人学生が、当然日本語を話すものとして受け入れることができないのが悩ましいところですね。ありがとうございます。次にシュヴァリエ先生はどうでしょうか。

シュヴァリエ：私も小嶋さんと同じように、外国人留学生と西南の学生がもっと交流してほしいと思います。国際化を進め、発展したいとすれば、やはり個人的な出会いはとても大事だと思います。別科の留学生と日本人学生が出会うチャンスはそんなにないと思うので、機会があるごとに授業の中で学生を誘っているんですが、日本人の学生はシャイだからなかなかすんなりといかず、ある程度時間がかかります。だから、もっと交流するチャンスを増やすことができればいいなと思っています。もう一つは、これも国際交流の一つだと思いますけど、大学院の研修生のことです。2年ぐらい前にフランスの大学の教授から、西南でフランス語の研修ができないかという依頼が来ました。フランスでは外国語としてのフランス語の教員の資格を取るために、大学院修士レベルの学生は皆研修しなければいけませんので、日本で研修したいというフランス人がかなり増えているように思います。日本の大学に行って、見て、理解して、そして教えてみるという経験が必要なんです。ですから、西南には大学院研修生という身分はなかったんですけれども、2年前、フランスから一人来て、そういう研修をしました。もちろん研修の内容はフランス語基礎など、毎週いろんなクラスに来て、フランス語専攻の学生とともに親しくなりましたし、おかげで学生もとても変わって積極的になり、クラスもオープンになって、これは、一つの成果だと思います。

司会：これまで大学院レベルとか教授の互換のことは話題にしませんでしたけども、新たに大学院で研修生を受け入れるシステムを確立しましたので、ぜひとも学部だけではなくて、大学院レ

ベルでの交換留学をもっと盛んにして行かなければならないですね。ありがとうございました。では、富澤君。



富澤：先ほど宮原先生が言われていたように、交換留学から帰国した私たちのような学生が、実際に西南で留学希望の学生に対してそういう経験を伝える機会がもっとあればいいなと感じます。やはり留学前に留学経験した人に話をしてもらったり、また私の場合、国際文化学部の主催で行われた中国語の暗唱大会に参加させてもらって中国の様子を話したりしたように、そういう機会がもっと増えればいいと思います。また留学をためらう理由として海外に行くという不安な部分があると思いますが、私自身は、就職活動で6月に帰国したら出遅れるんじゃないかと不安でした。ですから日本の大学自体が海外の留学と同じような学期制にもらえれば、学生の意識が変わってくるのかなと思います。

司会：そうですね。学期制は大きなテーマというか壁になっていて、大学の国際化に立ちはだかってきています。だから、東京大学が新しい試みをするということですので、やはり大きな関心事になっていくと思います。それでは最後に宮原先生お願いします。

宮原：2つあるんですが、1つ目はもっと気楽な国際交流をやるべきだということです。以前は1対1の相互の交換でとても限られた国際交流だったと思います。その名残りがたくさんあって、当時の田中輝雄学長から、「西南の国際交流はお座敷留学になっているのではないか」と言われました。というのは、留学生は玄関から入ってきて、お座敷の綺麗で立派なところだけ見て、そしてまた玄関から帰っていくということです。一般の学生から見れば、留学生別科の入学式の後にレセプションがあるなど非常に特別扱いをされているということです。私も今の国際交流は、特別な学生でなければ別科の学生とも交流できないような、^{かたし}袴を着た国際交流になっているような気がします。海外の大学では、教員が自分のクラスの学生を日本に連れてきて、2週間ぐらいの集中講義の間に、日本の企業を回っているような体験をして、また帰っていくというような国際交流を行っています。そういう短期の交流を、もっと気楽に、みんなが参加できるような国際交流制度にしていかなければいけないと思います。そういう意味では、別科をもっと拡大することによって、結果的には別科が無くなるという方向が理想的ではないでしょうか。もう1つは、私自身も、国際交流というと日本とアメリカという枠の中でしか考えていなかったように、国際センター所長として世界各地へ行くようになって、アメリカ偏重の国際交流をそろそろ考え直さなければならぬと感じました。福岡という地の利を活かすならば、マレーシア、インドネシアといった、ア

ジアの国々との交流をもっと広げていかなければいけないと思います。最近では韓国の協定校も増えてきたし、台湾、香港の大学とも始まりました。そういった意味では少しずつ進んでいます。もう少し勢いをつけてアメリカ以外の国との交流を進めていければと思います。

司会：長時間にわたりまして、「大学の国際交流40年 — その歴史と展望 —」のテーマで国際交流についての皆さんの貴重なご意見を伺うことができました。本当にありがとうございます。西南の国際交流は歴史とすばらしい伝統を持っていますが、やはり時代の変化の中で様々な意味で変革を遂げて、さらに発展していかなければならない、今や重要な時期にきているのではないかと改めて思います。皆さんには、個人的な体験を踏まえて、単に公式的な意見だけではなくて、いきいきとした国際交流のイメージが浮かび上がるようなお話を伺うことができ、本当にうれしく思っています。何よりも、西南に対する愛や熱い思いが底流に流れている貴重なお話ではなかったかと思っています。西南に行けば、こういうことを豊かに学べるんだというような、そういう夢を海外に発信できる、そういう大学として、さらに西南の教育研究の発展とその充実を図っていきべきだと考えます。皆様のご協力に心から感謝して、この座談会を閉じたいと思います。

この座談会は、2011(平成23)年9月27日に西南クロスプラザ2階ゲストルームで開催しました。